

== 特集 =====

合格への道のり

北海道大学分子病理学分野 岩崎 沙理

病理学はgeneralです。疾患の数だけ組織像はありひたすら勉強が必要で、専門医なんて何光年も先だろう、とっていました。確かに疾患は多いのですが、何百ページの形態学の本を暗記するような勉強は特に必要ないと、今になって思います。

自分の理解している範囲では、専門医に必要な基本的な力は、①病理学を学ぶ上で必要な用語、形態学を表す言葉、教科書を理解する力、②臓器の肉眼像や組織標本から所見を抽出する力、③個々の所見を総合的に解釈し診断する力、大きく分けてその三つだと思います。それぞれの力は別個に育つものではなく、繰り返し検体を見て、標本を見て、レポートを書いて、教科書を読んで、のプロセスの中で、地道に培われるものだと思います。

「標本から適切な所見を抽出し、その根拠の上に診断する」のは当たり前なのですが、非常に難しいことです。所見はすぐに誰でも気づくようなものから、本気になって探さないと見つからないものまであります。所見の解釈はさらに難しく、どの所見とどの所見を比較し、有意ととり、診断への根拠とするか、教科書の隅に書いてあることもあれば、教科書を何冊も並べて比較してみようやく理解できることもあります。しかし、そうしたプロセスを経ずに一部の所見をもってして安易に診断に飛びつき、大きく方向性を見誤ることが自分には何度もありました。似て非なる疾患を分けている事実・所見をどのように理解するか、そこが非常に難しいのですが、逆に言うと病理学の奥の深さや面白さでもあります。そして、診断はあくまでも客観的な事実・所見の上に成り立つもので、「占い」でも「思いつき」でもない、そう教えてもらい気づくまで自分は大変な時間がかかりました。

また、生体内の細胞たちはpotentialも環境も限られるため、どんな風な反応をするか(炎症性疾患)、変貌しうるか(腫瘍性疾患)は、思ったほどvariationはありません。言い換えると、同じような組織像を呈する疾患が意外にあるものです。それらの疾患の森の中から1本の木に辿り着くための鑑別にはどんなアプローチが適切なのか、先輩方の頭の中にあるようなアルゴリズムをいかにして自分の頭の中に作りあげるか、それが自分にとっては大きな課題でした。

疾患の鑑別というのは、すなわち、年齢、性別、発生部位、臨床経過、画像所見等を踏まえ、いかに適切な鑑別診断を挙げられるか、形態学や免疫組織化学の力を以てそれを適切に絞っていくか、ということだと思います。疾患ごとに分類しているのが内科学、症候ごとに分類しているのが診断学とすると、病

理医の仕事には診断学の要素が多分にあり、その能力を十分に高める必要があると考えています。

この基本技術①②③をある程度習得した上に、ようやく、頻度の低い疾患やあまり遭遇する機会の少ない疾患への知識が必要になると思いますが、太い幹を育てていけば枝葉をつけるようなもので、さほど労力を要しないように思います。また、検体中に診断を確定できる決定打があるのかないのか、自分の手の中で結論がでるのか出ないのか、専門家なら結論が出るのかでないのか、そういったことを見極められる力④も、身につけていかなくてはならないものだと感じています。

自分の場合には、大学での研修に加え、地方の拠点病院で勉強する機会を与えていただき、文字通り病理診断学の基礎を体得しながら、組織像・病態・臨床像を含めた疾患の全体像を効率良く学べたことが、専門医試験合格に至る一番の近道だったと自分では考えています。

年々、新たな疾患概念や疾患単位が増え、病理への要求水準も年々上がり、記載を求められる内容も細くなる一方のように思います。今後も引き続き努力し、力をつけていかなくてはならないことを痛感します。また、専門医として医療の一端を担うことに、重い責任を受け止めています。病理学が医学の中で非常に重要な位置を占めること、臨床の場で大きな力になること、研究にも大きく資する要素を持っていることは、確かなことです。今後も病理学の発展に尽力していきたいと願っています。

最後に、大学院等の事情がある中で、自分がこのスタートに立てたのは、一重に、励まし繰り返し御指導下さった諸先生のお陰だと思います。この場をおかりして、厚く御礼申し上げます。

留学手記

札幌医科大学医学部病理診断学 三橋 智子

私がアメリカで病理のレジデントを始めたのは1998年のことで、今年で丁度干支が1周してしまいました。1994年からの4年間はニューヨーク郊外の医学研究所で仕事をしていたのだが、中国やインドからの留学生MDは、USMLEに合格してレジデントになることを目標に頑張っていた。私自身はかつて考えたこともなかったが、ambitiousな人々には影響を受けるものである。それまで臨床病理との接点は殆どなかった私だが、研究生生活で培ったものを活かそうな気がしたこととニューヨーク大学医療センター(NYUMC)では当時、研究歴が評価されたことにより、私はNYUMCのanatomic pathology (AP)でレジデントを始めた。APコース、AP+Clinical Pathology (CP)コースのレジデントは1学年4~5名で、加えて外科病理、神経病理、血液病理、皮膚病理、腎病理などのサブスペシャリティのフェローが6~

7名おり、計30名ほどがNYUMCの3病院(Tisch Hospital, Bellevue Hospital, Hospital for Veterans Affair)でローテーションしていた。現在の日本とは異なり、切り出し時のデジタルカメラ撮影や画像に直接切り出し図を書き込む装置はなく、dictationといって音声録音した切り出し所見を、秘書が書きおこすシステムであった。切り出し当番の最初の1~2回は中々言葉が出ず、情けなくて代わりに涙が出てきたこともあった。翌日、標本とともに所見を記載した書類が大量に戻ってくるので、記述をチェックして修正していく。翌々日、attending pathologistに下見・記述した内容をチェックしてもらい、最終的にはattending pathologistがパソコン端末の病理診断システムに入力し、電子的にsign outしていた。1年目、2年目は外科病理と解剖のローテーションが続くが、2年目の後半~3年目はTisch Hospitalに隣接していたニューヨーク市の検屍官(Medical Examiner)オフィス、神経病理、血液病理、皮膚病理、腎病理、分子病理(cytogenetics)等でのローテーションや、1年目の解剖をsuperviseしていた。また3年目はAPのChief Residentを拝命し、上記30名程の年間スケジュール管理と人の配置に日々頭を抱えていた。3年目終了時にはAmerican Board of Pathology(アメリカ病理専門医試験)を受験するため、USMLE Step 3にまず合格しニューヨーク州の医師免許を取得しなければならなかった。

アメリカでは政府が資金を出してレジデントの給料を払い、彼らを雇う病院には確立したレジデント教育のシステムがある。3年間、診断病理に専従する生活は、臨床病理に対する強固なモチベーションに繋がった。今の自分を支えるのは、当時色々な人種が必死で働きながらも、互いに刺激、鼓舞しあい、協力しながら学んだ、診断病理の楽しさ、奥深さ、重要性である。またattending pathologist達からは、臨床チームの一員として、医療の質に大きく貢献しているという、専門医のプライド、症例から学ぶ謙虚さ、診断困難例に対する慎重な姿勢、レジデントのrole modelやbest teacherでありたいという前向きな思いが感じられた。今の自分を振り返るとき、この経験と思いをどこまで活かしているのか、自問自答の続く毎日である。

病理専門医試験合格体験記

東北大学大学院医学系研究科病理診断学分野 中村 保宏
平成22年度病理専門医試験が終了して、早3カ月が経ちました。当日京都は最高気温が37度と、大変な猛暑の中で受験したことを記憶しています。自分の試験勉強法や対策が、今後受験する皆様の御参考になれば幸いと存じます。

まず重要なのは、日常の診療業務をきちんとこなした上で、十分な試験勉強を行うことに尽きると思います。受験前から、同じ職場で既に試験に合格している諸先生方より「他科の専門医・認定医試験に比べ合格率は高くない。その理由は勉強範囲が広いだけでなく、病理以外の様々な臨床的な知識も必要となる為である。」と繰り返し助言を頂いておりました。その助

言に沿って試験対策を行ったことが合格につながったのだと感じております。

以下、実際に行った試験対策を記載致します。

<III型試験対策>1日目

出来るだけ多くの剖検数を自ら執刀して報告書を作成することが一番大切だと思いますが、最近は剖検数が減少しているために数を増やすのが難しいのが現状でした。そのかわりに、自分が執刀しなかった剖検例に関する総検査、剖検会、CPCになるべく多く参加し、その場で頭の中で肉眼的所見をとるトレーニング、病理診断(主病変、副病変)やフローチャートを作成する練習を行いました。

また私の場合、試験2カ月前から、自分が執刀しておらず既に最終報告書が出ている剖検例を選んで、臨床情報、肉眼画像、標本を見ながら、実際の試験のように2時間半で診断書、臨床上の問題点、フローチャートを作成することを数例行いました。これはとても有効であったと思います。参考書では、「カラーアトラスマクロ病理学第3版(西村書店)」、「第2、8回彩の国さいたま病理診断セミナー」のハンドアウトが大変役に立ちました。

<I, II型試験対策>1日目・2日目

過去の専門医試験問題と「病理専門医試験要項」に記載されている疾患リストを基本にして、「組織病理アトラス(文光堂)」、「病理組織の見方と鑑別診断(医歯薬出版)」、「彩の国さいたま病理診断セミナー(第2、8回以外の全部)」を繰り返し勉強し、また職場にあるスライドライブラリーを利用してなるべく多くの標本を検鏡しました。職場で週1回行われている症例カンファレンスもほとんど参加しました。「彩の国さいたま病理診断セミナー」も大変勉強になりました。細胞診は、「実践細胞診カラー図鑑(医歯薬出版)」と「細胞診セルフアセスメント(医学書院)」、病理学会主催の「細胞診講習会」テキストを勉強しました。I, II型の問題では、ほとんど典型的な症例が出題されますので、日常の業務に加え上記のような勉強で十分だと思います。

久しぶりに受けた試験ということもあり、この2日間は非常に長丁場を感じました。集中力を維持すること、最後まであきらめず、かつ冷静に試験に臨む必要があると思いました。また、私の場合、試験後の京都観光、京都の夏の味覚であるハモ、川床などを考える等、精神的に何かリラックスするものを想像したことも良かったのかもかもしれません。

以上、簡単ではありますが自分の経験を書かせて頂きました。合格したからこそ、「『合格』体験記」を書ける身分となりました。最後になりましたが、合格にあたり御指導頂きました笹野公伸教授をはじめ諸先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

病理専門医試験合格体験記

東京女子医科大学第2病理学教室 種田 積子

今後専門医試験を受ける先生方の参考になれば、と合格体験記を書かせて頂きます。私は卒後3年間は腎臓内科医として勤務し、その後6年間は米国のシアトルで、腎炎をテーマに研究生を送りました。その後、腎臓病理だけでなくきちんと全身臓器がみられる病理医になりたいと思い、帰国時35歳のときに東京女子医大の第2病理学教室に入り、今年40歳での専門医受験となりました。血液型はB型なものの気が小さく、家に帰れば5歳男児の世話が勉強時間があまりなく、試験前日まで時々波のように襲ってくる不安発作と戦う日々でした。試験勉強は「病理組織アトラス」と「病理組織の見方と鑑別診断(5版)」の両方を中心に読み込み、不得手なものはノートに書き出してまとめていきました。この両者は扱っている疾患が多少異なっており、どちらも読んだ方が良いと思います。アトラスの写真だけだと理解しにくいと思われたものは、疾患ごとに複数の典型的な画像をGoogleで検索、取り込んで、ノートに貼っていきました。また全「取り扱い規約」の写真の部分をコピーし、寝る前に順番に眺めるようにしました。細胞診に関しては、技師さんにティーチング用標本をお願いし、何度も見直しました。苦手なものを集めたノートは全8冊になり、それを最後1ヶ月は繰り返し眺め、暗記しました。医師国家試験時の時と違い、格段に記憶力が落ちていたのを、身にしみて感じる日々でした。自分なりに頑張りましたが、合格に当たって非常に大きかったのは、一緒に受験をした同僚の廣井敦子先生の存在でした。廣井先生と試験に出そうな豆知識などを、診断の合間に質問しあったり、試験に出そうな当院病院病理科の標本を見合ったりして切磋琢磨できたことは、自分にとって大変有難いことでした。

試験当日は、待機室で皆焦ったようにアトラスなどを読んでおり、私もその雰囲気にはまりました。ただ、試験が始まれば落ち着き、幸いなことに顕微鏡の不備も無く、自分の持っている実力が出せたと思います。試験では典型的な標本が沢山出て、「試験を受けながらも勉強になるなあ」と思いました。Ⅲ型問題(解剖)は、「見えていない物は書かない」「主病変は外さない」を心がけました。対策としては内科の全身疾患に関わる所などを復習しておくといいかもかもしれません。その後の面接においても、先輩病理医である面接官お二人に、所見の考え方を教えて頂き、よい勉強の機会であると思いました。

合格証を頂き、やっとスタートラインに立てたという感じです。これからも研鑽を積み、患者さんのために貢献できる仕事をしたいと思っています。最後になりましたが、これまで御指導いただきました小田教授、小林教授、西川教授、澤田教授および諸先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。暑い中試験を行ってくださった関係者の皆様も有り難うございました。

第28回病理専門医認定試験を受験して

信州大学医学部附属病院臨床検査部 浅野 功治

私は、41歳に1ヶ月足りない6年数ヶ月前に、病院における診断病理に転向しました。それまでの経歴は、国内某学の生理学の大学院生、某国の循環器内科学研究室のポスドク、国内某学の生理学の助手です。転向の理由はご想像にお任せしますが、この十数年間の臨床医学の進歩については浦島太郎状態であり、最初は話についていけませんでした。私より10歳以上も若い先輩たちの励ましと指導のおかげで、今まで何とか置いてもらっています。病理専門医の受験資格を得て、受験可能と思えるようになるまで6年かかりました。今の若い先生方なら、初期研修終了後最短の4年でも可能だとは思いますが、私の場合は、上記のような経歴と、正直言って年齢的なものが理由となり、四苦八苦の末です。

今回の受験準備はさらに難渋しました。3年前から、地域の医療系専門学校で病理学総論の授業を担当しています。毎年自分の復習から授業の準備が始まるのですが、今年は授業がちょうど試験の1週間前に終わるというスケジュールであり、結果として、かなり助けになったと思います。あとは、医学科学生用の500ページくらいの教科書を、総論から各論まで超高速ですが1回通読しました。以上が、Ⅲ型問題(解剖)の準備としてやれたことです。Ⅰ型、Ⅱ型問題については、病理学会報に掲載されている、過去10年の問題の答えの診断名を見て、そのイメージが頭に浮かぶかどうか、浮かばないやつだけ本を見る、という作業を1回だけやりました。試験前1ヶ月間に断続的に、試験対策として意識してやったのは以上です。と言うか、今でも日常業務でヒーヒー言ってる状態ですので、とてもこれ以上はできませんでした。

合格通知をいただいたのは、幸いと言うしかありません。あくまで、前述のような経歴の私個人の経験に基づく印象ですが、今までの病院病理の日常業務(生検、手術材料を診る)は、それ自体でⅠ型、Ⅱ型問題の準備に充分なつたと思います。しかし、マクロで見る眼力と、病理総論の素養が要求されるⅢ型問題(解剖)については、私の準備はまだまだ不十分だったと思います。これは、そのままトータルな病理医としての私の弱点を反映しているので、今後この弱点をまず減らしていく努力が必要です。

卒後あつという間に20何年かが過ぎ、医者人生の半分が過ぎてしまいました。現時点であと20年やれる体力的な自信はありません。だからこそ、その残りを悔いなく歩きおたく思うところです。このように、50歳も射程距離に入って再スタートの気分にある私にとって、この病理専門医というタイトルは、何とかもういっちょ！と思う私の背中を押してくれると思います。最後になりましたが、病理医および病理学研究者の諸先輩方、今後ともよろしくお願い申し上げます。

専門医試験合格への道

兵庫医科大学病院病院病理部 伊藤 敬

本年7月に施行されました、第28回病理専門医認定試験を受験しました。家族が入院したり、直前に風邪をひいたり逆風もありましたが、無事に合格することができました。試験が終わって振り返ってみると、この試験の難しい点は、やらなければならないことはわかっているが、それを実行する時間がないという所だと思えます。以下自分なりに気が付いたことを述べてみます。

受験者の中には早くから準備をされている方もおられると思いますが、自分は3月頃まで受験資格を満たすことができるかわからなかったのが、動き始めたのが4月からでした。そして毎年、春季病理学会が4月末～5月初め頃に開かれるので、4月中は学会準備に追われて試験勉強の時間がとれない方も多いかと思えます。自分もその類で、4月中は出願のための提出書類作りのみで終わってしまいました。それで実際に勉強を始めたのが5月中旬頃からでしたが最初はなかなかペースが上がりませんでした。ただでさえ仕事に忙殺され土、日も仕事を片付けに向く日が多い中、一体いつ勉強時間をとればいいのかわかりませんでした。それで仕方がないので、靴の中に常に組織病理アトラスを入れ、移動の時間や出先で時間が空いたら常に読み込むようにしていました。おかげで荷物が増えすぎてしまいましたが、また満員電車内の公衆の面前で病理肉眼写真を陳列するのどうかと思いましたが、特にクレームも出ませんでした。このようにあまり仕事は減らすことはできませんでしたが、手隙の時間をできるだけ勉強に充てるようにしました。

使った教材は文光堂の「組織病理アトラス」と医歯薬出版の「カラーアトラス病理組織の見方と鑑別診断」の2冊です。これらの本は出筆者が同じである臓器もありますが、それぞれの短所を補う領域もあり、また誰にでも手に入れられる書籍なので教材として適当ではないかと思えます。ただしここに記載されている項目がminimumで、後はいかにこれ以上積み上げていけるかという所を目標にするよと思えます。自分ももっと専門的な本を調べたり、実際に標本を鏡検したかったのですがそこまでは手が回りませんでした。

今回の試験の印象では、婦人科や呼吸器疾患などは組織像が特徴的であるとか変わっている疾患が出題されていたように思ったので、一度詳しい専門書の写真だけを流して見て、そのような疾患をピックアップするのも有用かと思えます。他には骨軟部腫瘍は年齢・性別・部位ごとに整理しておく、皮膚は悪性腫瘍を一通りまとめておく、等が役に立つやり方になるかと思えます。消化器については残念ながら傾向がつかめませんでした。また解剖の問題は、実際に経験する各自の解剖症例から得られる知見を蓄積することが結局は近道なのかと思えました。

以上思いついたことを述べさせていただきました。試験が終わ

った今、一番ありがたいのは平日の唯一の娯楽である通勤時の読書が再開できたことです。では今後専門医試験を受験される皆様の健闘を祈ります。

子育てをしながらの専門医試験

独立行政法人国立病院機構岡山医療センター 神農 陽子

この度専門医試験に無事合格することができました。4年前に出産し、すぐ二人目も授かって以来、まともにものを考える時間は勤務時間中以外にはほぼ取れなくなっていたので、資格が取れたということが嬉しくて仕方がありません。他人様に言えるような成績ではないかも知れませんが、自分の経験談を書かせていただこうと思えます。

現在は岡山医療センターで8時30分～5時の勤務をしています。時間外勤務は月1回のCPCのみです。病理医が3人いるので、子供が病気になったら休ませてもらっています。出産後は環境の変化と初めて触れる新生児の世話でいららし、一日家にいても家事も十分にできなくなりましたが、夫が自分から手伝ってくれ救われました。保育園に預けるようになると、保育士の先生方から子供との付き合い方を教わり、子供も3歳を過ぎてようやく気持ちが楽になりました。

現在、勤務できるのは、保育園がある時間帯のみで、以前の6～7割しかできていません。申し訳ない気持ちが強かったですが、同じ職場で2学年上のO先生は気が優しいが言うときはズバツという裏表のない人なので、気が楽になり、できることをしっかりやる、というスタンスで仕事をさせてもらっています。細胞診指導医を受験されるO先生の隣で標本を見るようになって1年が過ぎた頃、専門医受験に気持ちが向いてきました。

一通り家事育児もこなせるようになった夫に子供の世話をお願いして、2ヶ月間週2回程度、勉強時間を確保しました。III型問題では必出とされるが勤務ではあまり見る事のない中枢神経系の勉強をし、他は専門医試験出題要綱に出てくるものについて教科書を読み返しフォローしました。しかしこれのみにとらわれることなく、日常の診断で遭遇する、ありふれた疾患を確実に診断できるようになることが必要と思いました。細胞診はスクリーナーに直伝してもらいましたが、実際の試験問題は典型的な症例に限定されていました。

このように周囲の助けもあって何とか合格できました。なにより環境を整えてくださった吉野教授と岡山大学第二病理学教室の先生方には、深く感謝致します。

病理専門医試験を終えて

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科腫瘍学講座

分子細胞病理学分野 義岡 孝子

病理専門医試験の合格通知を受取ってから、早くも2ヶ月近くになります。今回の受験に際し、これから受験される先生方に自慢できるような成績をおさめたわけでもありませんので、的

確なアドバイスとなるかどうかわかりませんが、確実に記憶力が心許なくなってきた年齢に達した私なりの勉強方法をお伝えしたいと思います。

試験勉強の内容は、これまでの合格者の先生方がされてきたこととほぼ同じかと思います。まず、“組織病理アトラス”と“病理組織の見方と鑑別診断”の2冊を用い、“病理専門医試験要項”の記載されている疾患を確認していきました。大学病院で日常的に経験する疾患は偏りがあるためか、試験要項に記載されている疾患名の中には全くイメージできない疾患がありましたので、試験要項には一度は目を通しておくことをお勧めします。

試験の1ヶ月前からは、“彩の国さいたま病理診断セミナー”のハンドアウトで、いわゆる、“試験に出る”と言われている重要疾患を再度見直していきました。細胞診に関しては、3月に受講した“日本病理学会 細胞診講習会ハンドアウト”と“実用細胞診トレーニング”を通読しました。

実際に本番の試験で出題される写真は典型的なものが多いので、過去に出題された疾患が再出題されることが多いので、あまり多くの本に手を広げず、基本に忠実に、しっかりと記憶することが合格への近道になると思います。

剖検問題に関しては特別なことをしたわけではないので、いくつか気づいた点を述べたいと思います。まず、試験時間は2時間30分で長いようにも思いますが、受験してみるとむしろ時間が足りないと感じますので、時間配分が重要となります。2番目に、様々なセミナーで講師の先生がおっしゃるように、臨床経過、検査所見、肉眼所見(写真)でおおむね診断ができるようになっていきますので、標本を観る前に、整理をしてメモをとっておくと効率よく解答ができると思います。3番目に、組織標本を診る時は、その標本にみられた所見を素直に受け入れ、思い込みで診断をしないということが大事だと思います。4番目に、当日、面接担当の先生からもアドバイスされたのですが、面接は落とすためにやっているわけではないということでしたので、落ち着いて臨んでください。面接試験を受けている途中で自分の間違いに気づいた時は訂正が可能です。

手続き上のことでは、受験申請に必要な書類を揃えるにはそれなりの時間が必要ですので、早めの準備と申請書提出をお勧めします。それから、当然のことながら、試験の解答は自筆で日本語もしくは英語で正しく書かなければならず、コンピューター上で文書を作成するのは勝手が違いますので、若干の慣れが必要だと思います。

専門医試験を合格した今、やっと、病理医としてのスタート地点に立ったわけですが、自分がいかに未熟であるかを思い知らされ、ますます、精進していかなければならないと身の引き締まる思いです。

最後に、この場を借りまして、これまでご指導いただいた教室および教室OBの先生方をはじめ教室のスタッフの皆様、病院病理部のスタッフの皆様に心より感謝を申し上げます。

病理専門医試験合格体験記

佐賀大学病因病態科学 甲斐 敬太

私は2000年に佐賀大学を卒業後、一般・消化器外科に入局し、5年間の外科修練の後に、病理の大学院生となりました。昨年、同じ佐賀大学の先輩が体験記に記したように、佐賀県は病理専門医の数が少ないことで有名です。振り返れば、これは私にとって逆に恵まれた環境でした。少人数がゆえ、私は初めからスタッフの先生方と同量量の診断業務に携わらせて頂きました。また、肝胆膵の切除標本は外科の大学院生が切り出すのがなぜか慣例となっており、これも私がほぼ全例を担当させて頂きました。さらに、専門医受験のハードルである解剖も、当番の回転が速く、私自身のヒキ(?)も加わって受験資格を得るに至りました。

私は臨床に戻るつもりでしたので、消化器以外はあまり熱を入れていませんでした。昨年夏に病理医への転向を決心し、専門医試験の過去問に目を通したのは、今年の3月頃です。試験の難易度と力不足を思い知り、早速対策を始めました。まず、弱点である消化器以外の領域の勉強を集中的に行い、過去問は診断名をノートに書きながら知らない疾患を調べました。先輩方の体験記を参考に、教材は「病理診断アトラス」および「彩の国さいたま病理診断アトラス」を用い、特に「彩の国」の疾患は取りこぼさないよう勉強しました。大学の教員職の身ですので、日常の診断・研究・教育に支障を来さないよう、勉強は主に週末、3人の子供達の攻撃をかいくぐりながら行いました。

実際の試験では、冒頭の「考えすぎないでリラックスして回答してください」という試験委員の先生の挨拶が実は重要でした。今年は傾向が変わったのか、より日常診療に則した問題が多かった気がします。回答形式では、5択問題は全体を通して1問しかなく、正誤判定問題では保険診療に関する問題が新たに出题されました。試験時間に関しては、例年足りないといわれるIII型問題は、プレパレートが例年より少なく余裕がありましたが、問題だったのはII型問題でした。プレパレート1枚にかける時間は、回答時間を含めてIIa、IIb問題で一枚3分、IIc問題で2分半しかありません。特にIIc問題では、迷っていると、次の回答にも支障を来すので諦めも肝心ですが、私はそれができず失敗しました。もう一つ注意すべきは、「顕微鏡」です。贅沢な話かもしれませんが、試験用の顕微鏡は2倍の対物レンズがありません。視野も狭く通常使用しているものとは逆に動くため、最後まで慣れませんでした。「正答すべき問題はきっちり正答し、わからない問題にこだわらない」というのと「平常心」が重要だったと感じています。

なにはともあれ、病理専門医になりました。これからは、佐賀県の専門医育成に貢献したいと思いますし、それができるよう研鑽を積んでいきたいと思っています。最後に、今までお世話になりました諸先生方、特に私の病理診断のほぼ全てをオーディットして頂いた徳永 蔵教授に感謝を申し上げます。

== 支部報告 ==
--北海道支部--

北海道支部編集委員 佐藤 昌明

1. 学術集会報告

第142回標本交見会が平成22年7月24日(土)に札幌医大、臨床第1講義室で、また第143回標本交見会が札幌医大、北第1講義室でいずれも札幌医大第二病理、澤田典均教授を世話人として開催された。以下に症例を記載する。

第142回標本交見会

- 番号/発表者(所属)/演題名/年齢・性別/臨床診断/最終診断
10-06/八代真一(勤医協中央病院病理科)/
急速な経過をとり死亡に至った肝腫瘍/60代・女性/肝腫瘍/Angiosarcoma
10-07/徳差良彦(旭川医大病院病理部)/
内腔に粘液塊が充満した胆嚢腫瘍の一例/60代・女性/胆嚢腫瘍/
Carcinosarcoma of the gallbladder (Mucin-producing papillary
adenocarcinoma with a component of osteosarcoma)
10-08/市原 真(札幌厚生病院臨床病理科)/
特徴的な肉眼形態・組織像を呈した上行結腸腫瘍の1例/60代・男性/
大腸癌/Tubular adenoma with inverted growth
10-09/木村幸子(道立子ども総合医療療育センター病理)/
松果体腫瘍の一例/10代・男性/松果体腫瘍/Germinoma

第143回標本交見会

- 10-10/立野正敏(旭川医大免疫病理)/
若い女性二名にみられた子宮内膜病変/いずれも20代・女性/不正出血/
1. Endometrioid adenocarcinoma, G1, 2. Atypical polypoid adenomyoma
10-11/市原 真(札幌厚生病院臨床病理科)/
5ヶ月前に悪性と診断し得なかった十二指腸腫瘍の1例/80代・女性/
十二指腸腫瘍/Duodenal cancer, tub1, gastric phenotype
10-12/福田 由美子(手稲溪仁会病院病理診断科)/膵体部腫瘍の一例/
70代・男性/腺癌/Mixed acinar-endocrine carcinoma of pancreas
10-13/池田 仁(函館中央病院病理診断科)/
診断に苦慮した皮膚小円形細胞腫瘍の1例/70代・女性/左膝皮膚腫瘍/
Superficial (cutaneous) primitive neuroectodermal tumor

2. 今後の学術集会予定

第43回北海道病理談話会

平成22年10月30日(土)、北大医学部プラテ会館

第144回標本交見会

平成22年11月13日(土)、札幌医大、臨床第1講義室

第145回標本交見会

平成23年1月22日(土)、札幌医大、臨床第1講義室

第146回標本交見会

平成23年3月12日(土)、札幌医大、臨床第1講義室

== 東北支部 ==

東北支部業務・広報委員会委員長 鬼島 宏

第70回日本病理学会東北支部総会・役員会(平成21年7月17日(土)山形市山形テルサ)が、下記の要旨で開催された。

報告事項

1. 第71回支部学術集会の概要について(本山)
2. 総務報告(渡辺)
3. 学術委員会報告(田村)
4. 業務・広報委員会報告(鬼島)
5. 男女共同参画委員会報告(増田)
6. 本部と支部との関係について(本山)

7. 第6回病理夏の学校について(増田)

2011年岩手医科大学が担当

8. その他

協議事項

1. 平成21年度決算について(渡辺)
2. 平成22年度決算について(渡辺)
3. 平成22, 23年度の支部役員役割分担について(本山)
4. メーリングリスト、ホームページの今後について(渡辺)
5. 第72回支部学術集会について
(平成23年2月11,12日、仙台、本山梯一)
6. 第73回支部学術集会について
(平成24年夏、仙台、長沼 廣)
7. 学術委員会の活動について(田村)
8. 業務・広報委員会の活動について(鬼島)
9. その他

平成20, 21年度支部役員

各県選出:和田龍一、方山揚誠(青森)、榎本克彦、
齋藤昌宏(秋田)、増田友之、佐熊 勉(岩手)、前田邦彦、
田村 元(山形)、鈴木 貴、鈴木博義(宮城)、千葉英樹、
小野伸高(福島)、味岡洋一、酒井 剛(新潟)

歯科系:熊本裕行

全国区理事:笹野公伸

監事:浅野重之、菅井 有

学術委員会:田村 元(委員長)、方山揚誠、榎本克彦、
佐熊 勉、鈴木博義、千葉英樹、味岡洋一、熊本裕行
業務・広報委員会:鬼島 宏(委員長)、和田龍一、齋藤昌宏、
増田友之、前田邦彦、鈴木 貴、小野伸高、酒井 剛

運営・企画委員会

支部長:本山梯一

総務、財務、事務局:渡辺みか

学術委員会 委員長:田村 元

業務・広報委員会 委員長:鬼島 宏

事務局:小野寺綾佳

第71回日本病理学会東北支部学術集会(平成22年7月17日(土)~18日(日)山形市山形テルサ)が、下記の要旨で開催された。

特別講演:細胞接着・極性形成とヒト疾患

(演者 千葉英樹、福島県立医科大学)

教育講演1:皮膚病理診断ABC

(演者 泉 美貴、東京医科大学)

教育講演2:胃癌取扱い規約改訂のポイント、Group分類の
コンセプト (演者 中村眞一、DPR株式会社)

一般演題: 17題

各演題ともに、活発なかつ有意義な討議が行われた。

(一般演題一覧などは、次号掲載予定)

—関東支部—

関東支部支部長 加藤 良平

学術活動報告

下記の内容で第48回日本病理学会関東支部学術集会在開催されました。当日は173名の参加があり、特別講演3題と一般演題5題について活発な討議が行われました。

日時：2010年9月4日(土) 13:00～17:00

会場：東京医科大学病院 本館6F臨床講堂

世話人：長尾俊孝(東京医科大学人体病理学講座)

特別講演

テーマ：胃癌取扱い規約改訂のポイントと注意点

—臨床・病理双方の観点から—

座長：加藤 洋(獨協医科大学日光医療センター病理部)

- 胃良悪性境界病変の内視鏡所見とその新胃癌取扱い規約に基づいた対応
河合 隆(東京医科大学病院内視鏡センター)
- 胃癌取扱い規約第14版：病理分類の改訂のポイント
大倉康男(杏林大学医学部病理学教室)
- 胃癌取扱い規約第14版からみた組織診断
九嶋亮治(国立がん研究センター中央病院病理科)

一般演題

- 胃癌由来pulmonary tumor thrombotic microangiopathy の6症例
大久保陽一郎、根本哲生、若山 恵、横瀬智之*、北原加奈子、羽鳥 勉、
密田亜希、平野孝幸、笹井大督、下平佳代子、職 玉殊、渋谷和俊
(東邦大学医学部病院 病理学講座、神奈川県立がんセンター病理診断科*)
座長：藤井丈士(虎の門病院病理部)
- 扁平上皮への分化を伴った頸部原発のEwing sarcoma/primitive
neuroectodermal tumorの一例
神戸美千代、岸本 充、山崎一樹*、廣島健三**、田中水緒***、田中祐吉***、
堀江 弘****、中谷行雄(千葉大学、同耳鼻咽喉科*、東京女子医大八千代医療
センター**、神奈川県立こども医療センター***、千葉県立こども病院****)
座長：草間 博(東京医科大学人体病理学講座)
- 胃幽門前庭部粘膜下腫瘍の1例
池村雅子、高澤 豊、深山正久(東京大学医学部附属病院病理部)
座長：高橋芳久(帝京大学医学部病理学講座)
- High-grade fetal adenocarcinomaと考えられた肺癌の1例
河合繁夫、磯貝 進*、山内秀太*、白井俊純** (がん・感染症センター都立駒込
病院病理科、青梅市立総合病院呼吸器内科*、青梅市立総合病院胸部外科**)
座長：中谷行雄(千葉大学大学院医学研究科診断病理学)
- 癌性胸腹水の発症におけるリンパ管小孔への癌転移の意義
大城 久^{1,2)}、奥寺康司³⁾、工藤朝雄³⁾、島津徳人³⁾、青葉孝昭³⁾、山中正二²⁾、
長濱清隆²⁾、芹澤博美¹⁾、長尾俊孝¹⁾、五味 淳²⁾、長嶋洋治²⁾、矢澤卓也²⁾、
下山田博明²⁾、青木一郎²⁾、稲山嘉明²⁾ (東京医科大学人体病理学講座¹⁾、
横浜市立大学附属病院病理部²⁾、日本歯科大学生命歯学部病理学講座³⁾)
座長：石田康生(帝京大学ちば総合医療センター病理部)

第49回(社)日本病理学会関東支部学術集会

(第131回東京病理集談会)のお知らせと一般演題募集

日時：平成22年12月11日(土)

会場：日本医科大学(教育棟講義室)

〒113-8602 東京都文京区千駄木1-1-5

交通：地下鉄南北線 東大前駅 徒歩5分

地下鉄三田線 白山駅 徒歩10分

地下鉄千代田線 根津駅または千駄木駅 徒歩7分

会費：1,000円

世話人：日本医科大学病理学講座(統御機構・腫瘍学)

内藤 善哉

今回の学術集会是東京病理集談会を兼ね、原則として剖検症例を募集しますが、昨今の剖検率の減少を鑑み外科症例も可と致します。テーマは特に設けません。奮ってご応募ください。

今回は麻生総合法律事務所の麻生利勝先生に、医療訴訟、なかでも特に病理に関係するお話を、また横浜市立大学附属市民総合医療センター病理部の佐々木毅先生に病理医の立場から実際に会った事例等について、特別講演をいただく予定です。

<プログラム>

- 11:00-12:00 幹事会(日本医科大学教育棟3階第一会議室)
12:00-16:00 標本供覧(Ⅱ教育棟2階 講義室2)
13:00-17:00 特別講演2題および一般演題
(剖検例あるいは外科症例5題程度)(2階 講義室)
17:20-19:00 懇親会予定(橋桜会館 地下1階)

<演題募集要項>

- 発表はWindows XP (PowerPoint2003/2007)による投影のみとします。発表希望者は、演題名ならびに発表者氏名・所属を含む演題要旨(400字程度、問題点を含む)をMS Wordで作成し、これを添えて演題申込先あてにe-mailでお申し込み下さい。
- 1)とは別に、演題症例で特に重要と考えられるパラフィンブロック2個以内(200枚薄切可能なもの)を送付してください。
- 演題申込先e-mailアドレス：naito@nms.ac.jp
- 演題申込締め切り：平成21年11月12日

演題症例未染標本の送付を希望する施設の代表者は、演題申込先までe-mailにてご一報下さい。1施設1組のみで、料金は2,000円です。

連絡・問い合わせ：

日本医科大学病理学講座(統御機構・腫瘍学)

内藤 善哉(秘書：小野)

〒113-8602 東京都文京区千駄木1-1-5

Tel. 03-3822-2131 内線5232 Fax. 03-5814-6274

E-mail : naito@nms.ac.jp

山梨ぶどうの会

第73回 平成21年11月30日 参加者9名

於：山梨大学・人体病理学講座集会室

番号/部位/年齢・性別/病理診断/出題者

443/卵巣/70歳代/女性/Malignant mixed epithelial tumor, malignant Brenner tumor and endometrioid adenocarcinoma /中澤 匡男(山梨大学・病理部)

444/腸管膜/80歳代/女性/Intra-abdominal fibromatosis/

近藤 哲夫(山梨大学・人体病理学)

445/肺/80歳代/男性/Pleomorphic carcinoma/山根徹/(山梨大学・人体病理学)

第74回 平成22年2月1日 参加者14名

於：山梨大学・臨床小講堂

特別講演

「高齢者胃癌・大腸癌の臨床病理学的特徴」

東京都健康長寿医療センター 新井富生先生

症例検討会

446/胃/80歳代/女性/Gastroblastoma/近藤 哲夫/(山梨大学・人体病理学)

447/小腸/30歳代/男性/Gastrointestinal stromal tumor/

山根 徹(山梨大学・人体病理学)

第75回 平成22年4月5日 参加者10名

於:山梨大学・人体病理学講座集會室

448/腎臓/60歳代/男性/Mucinous tubular and spindle cell carcinoma, mucin-poor variant/小山 敏雄(山梨県立中央病院・病理)

449/腎臓/60歳代/男性/Malignant mixed epithelial and stromal tumor of the kidney/小山 敏雄(山梨県立中央病院・病理)

450/膵臓/20歳代/女性/Solid-pseudopapillary tumor/望月 邦夫(山梨大学・人体病理学)

第76回 平成22年6月21日 参加者11名

於:山梨大学・人体病理学講座集會室

451/リンパ節/60歳代/男性/Mantle cell lymphoma/小俣 好作(社会保険山梨病院・病理)

452/腹壁/70歳代/男性/Blastic formation of mantle cell lymphoma/小俣 好作(社会保険山梨病院・病理)

453/腎臓/1ヶ月/女児/Congenital mesoblastic nephroma, cellular type/望月 邦夫(山梨大学・人体病理学)

454/耳下腺/50歳代/男性/Sclerosing polycystic adenosis of the parotid gland/小山 敏雄(山梨県立中央病院・病理)

455/卵巣/50歳代/女性/Sertoli-Leydig tumor, intermediate, with retiform element/小久保 武(菊名記念病院・病理)

事務局: 中澤 匡男 (山梨大学医学部附属病院病理部)

E-mail: tadaon@yamanashi.ac.jp

Web Site: http://www.yamanashi.ac.jp/education/medical/clinical_basic/pathol02/offices.htm

関東支部・千葉地区集會

第32回 2009年10月24日(土) 千葉大学医学部第一講義室

症例番号/出題者所属/氏名/年齢性別/出題名/出題者診断/最終診断

32-1/成田赤十字病院病理部/小豆畑康児, 他/50歳代男性, 60歳代男性/肝内胆管癌・肝細胞癌の同時性重複癌2切除例/肝内胆管癌・肝細胞癌の同時性重複癌/同

32-2/東邦大学医療センター佐倉病院病理診断科/笹井大督, 他/50歳代女性/診断に苦慮したFemale adnexal tumor of probable wolffian origin (FATWO)の1例/ FATWO/同

32-3/日本医科大学千葉北総病院病理部/森田布季子, 他/肺病変を含めた広範なKaposi肉腫を伴うAIDSの1例/ Kaposi肉腫/同

第33回 2010年5月8日(土) 於:千葉大学医学部第3講義室

33-1/独立行政法人国立病院機構千葉医療センター臨床検査科病理/永井雄一郎, 他/70歳代男性/横紋筋芽細胞様形態を呈した脳腫瘍の1例検例/転移性脳腫瘍/膵癌脳転移疑

33-2/千葉大学大学院医学研究院病態病理/岸本充, 他/10歳台女児/女児頸部腫瘍の1例/ Adamantinoma-like Ewing sarcoma/同

33-3/東邦大学医療センター佐倉病院病理部/徳山宣, 他/40歳代女性, 40歳代女性/子宮内膜症から発生したと考えられた良性上皮成分を伴った子宮内膜間質肉腫の2例/子宮内膜間質肉腫, adenosarcoma with sarcomatous overgrowth/同

中部支部

中部支部編集委員 福岡 順也

第4回日本病理学会中部支部「夏の学校」が 富山県立中央病院 寺畑信太郎先生と、富山大学 福岡順也 の世話で、2010年8月21-22日(土-日) @ホテル グリーンハイツ立山で開催された。参加者は126名(うち医学部生61名、病理に興味をもつ若手医師11名)

シンポジウム・教育講演 テーマ

1. 「病理診断」座長:齋藤勝彦先生(富山市民病院) 前田宣延(富山赤十字病院)、堤寛(藤田保健衛生大学)、寺畑信太郎(富山県立中央病院)、西田尚樹(富山大学)
2. 「私の履歴書」座長:寺畑信太郎(富山県立中央病院) 清川貴子(千葉大学)、村田哲也(鈴鹿中央病院)、原田憲一(金沢大学) 松能久雄(富山病理診断センター)、岸川正大(長崎診断病理科)、高柳尹立(富山市医師会)
3. 「研究」座長:笹原正清 小田恵夫(アルプ病理研究所)、谷田部恭(愛知県がんセンター)、高橋雅英(名古屋大学)
4. 特別講演:「The Diagnostic Process in Surgical Pathology」 Dr. Steven G Silverberg (Department of Anatomic Pathology, University of Maryland)
5. 「留学」座長:清水重喜(富山大学) 石澤伸(富山大学)、福岡順也(富山大学)、二口充(名古屋市立大学)

中部支部・東海病理医会

第252回

(平成 22年5月22日参加者27名於:藤田保健衛生大学)

症例番号 病院名 病理医 年齢 性 臓器 臨床診断 病理組織学的診断

- 4099 藤田保健衛生大学 高桑康成 2 女 縦隔 上縦隔腫瘍 Ganglioneuroma
- 4100 藤田保健衛生大学 高桑康成 80 女 卵巣 卵巣腫瘍 Mucinous tumor with Leydig cell components
- 4101 藤田保健衛生大学 桐山論和 20 女 肺 気胸 Lymphangiomyomatosis
- 4102 藤田保健衛生大学 桐山論和 30 女 肺 気胸 Lymphangiomyomatosis
- 4103 トヨタ記念病院 桐山論和 70 男 リンパ節 リンパ節腫脹 Angioimmunoblastic lymphadenopathy
- 4104 名古屋記念病院 西尾知子 40 女 リンパ節 リンパ節転移 Lymph node involvement of angiolymphoma
- 4105 名古屋記念病院 西尾知子 60 男 肝 肝細胞癌 Hepatocellular carcinoma with cholangiolocellular differentiation
- 4106 藤田保健衛生大学 熊澤文久 50 男 肝 肝腫瘍 Cholangiocellular carcinoma with angiomatoid feature
- 4107 蒲郡市民病院 浦野 誠 10 男 小腸 メッケル憩室 Meckel's diverticulum
- 4108 静岡赤十字病院 笠原正男 50 男 脊髄 脊髄腫瘍 Atypical neurocytoma
- 4109 静岡赤十字病院 笠原正男 60 男 肺 肺結節 Filariasis
- 4110 静岡赤十字病院 笠原正男 40 女 乳腺 乳癌 Markedly mastopathy with ductal carcinoma in situ
- 4111 聖隷三方原病院 高橋青志郎 60 女 乳腺 乳腺腫瘍 Matrix producing carcinoma
- 4112 高山赤十字病院 岡本清尚 40 女 胃 胃粘膜下腫瘍 Inflammatory fibroid polyp
- 4113 鈴鹿中央総合病院 村田哲也 30 女 乳腺 乳癌 Invasive ductal carcinoma and adenomyoepithelioma
- 4114 鈴鹿中央総合病院 内山智子 60 男 胃 胃粘膜下腫瘍 Leiomyoma
- 4115 江南厚生病院 福山隆一 10 男 軟部 軟部腫瘍 Benign fibrous tumor
- 4116 江南厚生病院 福山隆一 60 男 鼻中隔 鼻中隔腫瘍 Papillary adenocarcinoma

第253回

(平成22年6月19日 参加者14名 於:藤田保健衛生大学)

- 4117 藤田保健衛生大学 高桑康成 20 女 子宮 子宮肉腫 Myxoid leiomyosarcoma
- 4118 藤田保健衛生大学 熊澤文久 40 男 軟部 血管平滑筋腫瘍 Glomangioma
- 4119 野垣病院 黒田 誠 60 女 結腸 結腸ポリープ Colonic muco-submucosal elongated polyp

- 4120 新城市民病院 黒田 誠 70 女 肝 GIST肝転移
Focal nodular hyperplasia
- 4121 聖隷三方原病院 高橋青志郎 70 男 肺 肺腫瘍
Well differentiated liposarcoma-like lesion
- 4122 静岡赤十字病院 笠原正男 40 女 胸腺 胸腺腫
True thymic hyperplasia
- 4123 静岡赤十字病院 笠原正男 70 女 卵巣 卵巣腫瘍
Serous surface capillary carcinoma
- 4124 静岡赤十字病院 笠原正男 10 女 脳 小脳腫瘍
Anaplastic ependymoma
- 4125 静岡赤十字病院 笠原正男 50 男 肺 肺癌
Adenocarcinoma with organizing pneumonia
- 4126 小牧市民病院 桑原恭子 60 男 鼻腔 鼻腔腫瘍
Neuroendocrine carcinoma
- 4127 小牧市民病院 桑原恭子 60 女 結腸 慢性下痢症 Collagenous colitis
- 4128 鈴鹿中央総合病院 村田哲也 70 男 前立腺 前立腺癌
Sclerosing adenosis

第254回

(平成22年7月17日 参加者17名 於:藤田保健衛生大学)

- 4129 新城市民病院 熊澤文久 70 女 十二指腸 粘膜下腫瘍
Well differentiated neuroendocrine tumor
- 4130 藤田保健衛生大学 熊澤文久 40 女 肺 カルチノイド
Well differentiated neuroendocrine carcinoma
- 4131 藤田保健衛生大学 熊澤文久 30 男 精巣 精巣腫瘍
Mixed germ cell tumor
- 4132 藤田保健衛生大学 桐山諭和 20 男 腎 腎腫瘍 Renal cell carcinoma
- 4133 藤田保健衛生大学 浦野 誠 60 女 胸腺 前縦隔腫瘍
MALT lymphoma
- 4134 藤田保健衛生大学 浦野 誠 30 女 副腎 副腎腫瘍 Adrenal cyst
- 4135 トヨタ記念病院 北川 諭 60 男 肺 肺癌
Lung cancer arising from interstitial pneumonia
- 4136 静岡赤十字病院 笠原正男 40 男 脳 脳腫瘍
Anaplastic oligastrocytoma
- 4137 静岡赤十字病院 笠原正男 70 女 脳 脳出血 Amyloid angiopathy
- 4138 静岡赤十字病院 笠原正男 80 女 脾 脾腫瘍 Lymphangioma
- 4139 静岡赤十字病院 笠原正男 70 男 副甲状腺 副甲状腺腫瘍
Parathyroid adenoma
- 4140 東市民病院 鈴木周吾 60 男 軟部 舌腫瘍 Atypical lipomatous tumor
- 4141 鈴鹿中央総合病院 内山智子 40 女 膀胱 尿管管癌
Inflammatory myofibroblastic tumor

中国四国支部

中国・四国支部編集委員 藤原 恵

A. 開催報告

1. 第102回学術集会

開催日:平成22年7月17日(土)

場所:米子コンベンションセンターBiG SHiP 2階 国際会議室

世話人:鳥取大学医学部基盤病態医学講座

器官病理学分野 井藤 久雄 教授

前日まで中国山地に豪雨災害があり、開催が危ぶまれましたが、学会当日は晴れ渡り、交通にも支障はなく、本格的な学会場で開催されました。

「日光角化症、Bowen 病、そして有棘細胞癌」のタイトルで、鳥取大学医学部皮膚病態学分野の山元修教授による特別講演と25題の一般演題が行われました。

- 演題番号/タイトル/出題者(所属)/出題者診断/最多投票診断
S2281/遷延性意識障害/加藤信介(鳥取大学医学部脳病態医学分科)/
Extrapontine myelinolysis/Creutzfeldt-Jacob disease
- S2282/左副鼻腔病変/内野かおり(姫路赤十字病院病理診断科)/
Fibrous dysplasia/Ossifying fibroma
- S2283/肺病変/飛田 陽(松山赤十字病院)/
Diffuse pulmonary lymphangiomatosis/Inflammatory pseudotumor
- S2284/肺腫瘍/松本 学(高知医学部附属病院病理診断部)/
Extraskelletal myxoid chondrosarcoma/concord
- S2285/下顎骨腫瘍/大林真理子(広島大学病院 口腔検査センター)/
Central mucoepidermoid carcinoma/Clear cell odontogenic carcinoma
- S2286/食道腫瘍/酒井亮太(香川大学医学部附属病院 病理部)/
Carcinosarcoma with basaloid carcinoma/Carcinosarcoma
- S2287/胃腫瘍/黒田直人(高知赤十字病院)/PDGFRA-mutated GIST/GIST
- S2288/腸間膜・胃粘膜下腫瘍/倉岡和矢(呉医療センター中国がんセンター)/
Inflammatory MFH/Inflammatory myofibroblastic tumor
- S2289/膝嚢胞性腫瘍/田村麻衣子(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病理学)/
Anaplastic carcinoma arising from mucinous cystic neoplasm/Anaplastic carcinoma
- S2290/乳房腫瘍/長崎真琴(国立病院機構浜田医療センター研究検査科)/
Clear cell hidradenoma/Adenomyoepithelioma
- S2291/乳腺腫瘍/浦岡直礼(広島大学大学院 分子病理学)/
Mucinous cystadenocarcinoma/concord
- S2292/演題取り消し/
- S2293/子宮体部腫瘍/河内茂人(山口大学大学院分子病理学)/
Angiomyolipoma/concord
- S2294/子宮体部腫瘍/濱岡真実子(島根大学医学部器官病理学)/
Adenosarcoma/concord
- S2295/子宮体部病変/西阪 隆(県立広島病院臨床研究検査科)/
Neuroendocrine carcinoma/Lymphoepithelial carcinoma
- S2296/子宮腫瘍/天野知香(島根大学医学部病態病理学講座)/
Leiomyosarcoma/concord
- S2297/眼瞼腫瘍/田中麻衣子(広島大学病院病理診断科)/Apocrine carcinoma
with invasive micropapillary pattern/Invasive micropapillary carcinoma
- S2298/皮膚リンパ節病変/都地友紘(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病理学)/
Blastic plasmacytoid dendritic cell neoplasm/Malignant lymphoma
- S2299/皮下腫瘍/前田智治(愛媛県立中央病院)/
Angiomatoid fibrous histiocytoma/concord
- S2300/皮膚腫瘍/大沼秀行(島根県立中央病院病理組織診断科)/
Cutaneous marginal zone lymphoma/Plasmacytoma
- S2301/腎腫瘍/中山宏文(広島鉄道病院臨床検査室)/
Infiltrating urothelial carcinoma, sarcomatoid variant/Spindle cell carcinoma
- S2302/腎腫瘍/河野裕夫(山口大学医学部病理形態学)/
Chromophobe cell carcinoma/Renal oncocytoma
- S2303/腎腫瘍/渋谷信介(香川大学医学部附属病院病理部)/
Clear cell sarcoma/concord
- S2304/精巣病変/増田渉(倉敷中央病院病理検査科)/
Adenomatous hyperplasia of rete testis/Adenocarcinoma of rete testis
- S2305/仙尾部腫瘍/石川典由(島根大学医学部器官病理学)/
Primitive myxoid mesenchymal tumor of infancy/Infantile fibromatosis
- S2306/後腹膜腫瘍/小林計太(鳥取市立病院病理診断科)/
Intravenous leiomyomatosis/ concord

2. 第8回骨髄病理研究会

川崎医科大学病理学1 定平 吉都

本年は、新WHO分類(骨髄系疾患)をテーマに開催しました。まず新WHO分類(骨髄系疾患)の主に白血病と骨髄異形成症候群について、ランチョンセミナーで長崎大学の宮崎教授にさせていただいて、次にあらかじめ承諾を得られた9名の解説者が、本分類に取り上げられている重要な疾患について、症例を提示して解説を行いました。参加者には、事前にカラー

のハンドアウトを配布し、前日の16:00-18:00と当日の午前中に会場である川崎医科大学現代医学博物館2階大講堂で、実際の標本を検鏡することができるようにしました。また、例年32台の顕微鏡を今回は40台に増やしました。

開催日の2009年9月5日(日)は、猛暑であり、また新幹線が大阪～岡山間で午前9時半頃まで不通になるなどのアクシデントがあったにもかかわらず、外部から107名(病理医52、内科医11、技師42、学生2)が参加しました。川崎医科大学附属病院から25名(病理医5、内科医7、技師11、学生2)を含め総計132名で、これまででもっとも多い参加者数となりました。病理部、中央検査部、血液内科と日頃から骨髓標本の診断にたずさわっている方々が主体ですが、今年は昨年に比べて特に関東からの若い病理医が増加したのが特徴です。この方面の専門家の発表であるため発表内容のレベルが高くなってきている反面、話自体はわかりやすくなっており、参加されたほとんどの方に楽しんでいただけたという印象です。

本会がこれまで続けてこられたのは、多数の方々の無償のご協力の賜物で、今後さらに盛り上がるような新しい企画を考えなければと思っております。来年は、単球・マクロファージ系の反応性・腫瘍性疾患について、昨年完成した川崎医科大学校舎棟のマルチメディア教室で、バーチャルスライドや顕微鏡を利用した研究会を開けないものかと考えています。

[症例発表]

- 症例1. 好酸球増殖症 高知大学医学部附属病院病理部 弘井 誠
- 症例2. 演題取り下げ
- 症例3. CML blast phase 虎の門病院病理部 大田 泰徳
- 症例4. ダウン症候群関連骨髄性白血病
東京歯科大学市川総合病院臨床検査科 宮内 潤
- 症例5. 5q- with myelofibrosis 福岡大学医学部病理学 竹下 盛重
- 症例6. Hairy cell leukemiaおよび周辺疾患 埼玉医科大学病理学 茅野 秀一
- 症例7. Blastic plasmacytoid dendritic cell tumor
日本医科大学多摩永山病院 病理部 細根 勝
- 症例8. MDS 名古屋第一赤十字病院病理部 伊藤 雅文
- 症例9. M6/MDS 川崎医科大学病理学 I 定平 吉都
- 症例10. 5q-症候群 川崎医科大学検査診断学 松岡 亮仁

B. 開催予定

1. 第103回学術集会

開催日:2010年11月6日(土)

世話人:呉共済病院・佐々木なおみ部長

会場:呉共済病院 多目的ホール

内容:スライドカンファレンス

2. 第104回学術集会

開催日:2011年2月19日(土)

世話人:山口大学 池田栄二教授

九州・沖縄支部

九州・沖縄支部編集委員 小田 義直

第316回九州・沖縄スライドカンファレンスが下記のように開催されました。

日時:平成22年7月17日

場所:産業医科大学ラマツィーニホール

世話人:産業医科大学医学部第一病理学 橋本洋 教授
産業医科大学医学部第二病理学 篠栗靖之 教授
参加人数:120名

- 症例番号/出題者/所属/患者年齢/患者性別/部位/
出題者診断/投票最多診断(投票数37)
- 1/ 藤原弘明/九州大学口腔病理学/10代/男/上顎/
Calcifying cystic odontogenic tumor/ Calcifying cystic odontogenic tumor
- 2/ 河野真司/原三信病院/50代/女/甲状腺/
Follicular adenoma, oxiphilic cell type/Follicular adenoma, oxiphilic cell variant
- 3/ 義岡孝子/鹿児島大学分子細胞病理学/乳児/男/肺/Rhabdomyomatous dysplasia of the lung/ Congenital cystic adenomatoid malformation, NOS
- 4/ 渡辺次郎/公立八女病院/70代/女/肺/
Spindle cell carcinoma/ Spindle cell carcinoma
- 5/ 大重要人/福大筑紫病院/50代/女/食道/GIST, malignant/ GIST, NOS
- 6/ 島尻 正平/産業医科大学第二病理学/50代/女/脾/
Sclerosing angiomatoid nodular transformation/ Inflammatory pseudotumor
- 7/ 成毛有紀/長崎医療センター/40代/男/腎/
Papillary RCC, type I/ Papillary RCC, NOS
- 8/ 有馬 信之/熊本市市民病院/70代/男/膀胱/Urothelial carcinoma, micropapillary variant/ Urothelial carcinoma, micropapillary variant
- 9/ 北園育美/鹿児島大学人体がん病理学/70代/男/精巣/
Carcinoma of the rete testis/ Malignant mesothelioma
- 10/阿萬 紫/九州大学形態機能病理学/40代/女/卵巣/
Clear cell adenocarcinoma with rhabdomyosarcomatous component/ Clear cell adenocarcinoma with mature teratoma
- 11/ 甲斐 敏太/佐賀大学病因病態学/60代/女/乳腺/
Invasive ductal carcinoma with reduced E-cadherin expression/ Invasive ductal carcinoma, NOS
- 12/ 本田 由美/熊本大学附属病院/60代/女/乳腺/
Pleomorphic carcinoma/ Metaplastic carcinoma, NOS
- 13/ 山田 壮亮/産業医科大学第二病理学/70代/女/腎/
TTR amyloidoma of the kidney/ Amyloid tumor
- 14/ 久岡 正典/産業医科大学第一病理学/50代/女/腹壁/
Low-grade fibromyxoid sarcoma with giant collagen rosettes/ Low-grade fibromyxoid sarcoma
- 15/ 兒玉 志保/福岡大学病院病理部/50代/男/腹膜/
Inflammatory MFH / Inflammatory MFH
- 16/ 野元 三治/鹿児島医療センター/430代/女/心臓/
Inflammatory myofibroblastic tumor/ Inflammatory myofibroblastic tumor
- 17/ 廣石 和章/大分大学診断病理学/60代/男/心房/
Synovial sarcoma/ Synovial sarcoma

同時に第83回九州病理集談会も開催されました

- 1. 産業医科大学第二病理:山田壮亮:共通肺静脈閉鎖等を伴った、特異なtotal anomalous pulmonary vein drainage (TAPVD); 総肺静脈還流異常症)の一例
- 2. 九州労災病院病理科:横原康亮: PEL-like lymphomaの一例

また第317回九州・沖縄スライドカンファレンスが下記のように開催されました。

日時:平成22年9月18日

場所:九州大学病院地区 コラボステーションI

世話人:九州大学大学院医学研究院基礎医学部門
病態制御学講座病理病態学形態機能病理学

参加人数:158名

今回は年に一回の臨床との合同カンファレンスで肺・胸膜腫瘍を主題としました。

コメンテーターとして臨床より九州大学呼吸器内科中西洋一

教授を、病理より筑波大学診断病理学野口雅之教授をお呼びして、活発な発表および討論がなされました。

症例番号/出題者/所属/患者年齢/患者性別/部位/
出題者診断/投票最多診断(投票数29)

- 1/ 加藤文章/ 福岡大学病理学/ 50代/ 女/ 肺(右下葉)/
Sclerosing hemangioma/ Sclerosing hemangioma
- 2/ 森大輔/ 佐賀県立病院/ 60代/ 男/ 気管支/
Pleomorphic adenoma/ Pleomorphic adenoma
- 3/ 榎原康亮/ 九州労災病院/ 70代/ 男/ 肺/
Sebaceous carcinoma of the lung/ Mucoepidermoid carcinoma, NOS
- 4/ 加島健司/ 大分大学診断病理学/ 70代/ 女/ 肺/
Ciliated muconodular papillary tumor of the peripheral lung/
Mixed squamous cell and glandular papilloma
- 5/ 渡辺次郎/ 公立八女病院/ 80代/ 男/ 肺/
Basaloid squamous cell carcinoma/ Combined LCNEC and SCC
- 6/ 河崎 英範,加藤誠也/ 沖繩病院,琉球大学細胞病理学/ 70代/ 男/ 肺/
Squamous metaplasia with atypical basal cell hyperplasia/
Squamous cell carcinoma
- 7/ 矢田直美/ 大分大学診断病理学/ 60代/ 男/ 肺/
Basaloid squamous cell carcinoma/ Basaloid squamous cell carcinoma
- 8/ 畑中 一仁/ 鹿児島大学分子細胞病理学/ 70代/ 女/ 肺/
Bronchioloalveolar carcinoma/ Bronchioloalveolar carcinoma
- 9/ 本田由美/ 熊本大学病院病理部/ 60代/ 女/ 肺/
Adenocarcinoma, mixed type with stromal chondroplasia/
Bronchioloalveolar carcinoma with hamartoma
- 10/ 田中 弘之/ 宮崎大学腫瘍再生病態学/ 70代/ 男/ 肺/
Papillary carcinoma with prominent molule component/
Adenocarcinoma with molule
- 11/ 津野田 翔, 佐藤 勇一郎/ 宮崎大学構造機能病態学/ 70代/ 男/ 肺/
Large cell carcinoma with rhabdoid phenotype/
Large cell carcinoma with rhabdoid phenotype
- 12/ 神尾 多喜浩/ 済生会熊本病院/ 50代/ 男/ 肺/
Pleomorphic carcinoma/ Pleomorphic carcinoma
- 13/ 池田 圭祐/ 福岡大学筑紫病院/ 60代/ 男/ 肺/
MALT lymphoma/ MALT lymphoma
- 14/ 佛淵 由佳/ 九州大学形態機能病理学/ 乳児/ 男/ 肺/
Congenital peribronchial myofibroblastic tumor/
Congenital peribronchial myofibroblastic tumor
- 15/ 杉尾 賢二, 田口 健一/ 九州がんセンター/ 60代/ 女/ 肺/
Amyloid tumor/ Amyloid tumor
- 16/ 高橋 祐介/ 九州大学形態機能病理学/ 60代/ 男/ 気管支/
EBV-associated smooth muscle tumor/ Leiomyoma, NOS

==アンケート=====

病理専門医部会会報についてのアンケート結果

病理専門医部会会報編集委員会

先日行いました病理専門医部会会報についてのアンケートの結果を報告いたします。(なお、設問7,8は雑誌「診断病理」に関するもの)

支部別アンケート回収数(合計 357)

北海道 23 東北 51 関東 83 中部 13 近畿 49
中国四国 46 九州沖縄92

1. 雑誌「診断病理」の巻末に病理専門医部会会報が掲載されていることをご存知ですか?

知っている 81.5% 知らなかった 17.9%
「診断病理」自体を知らない 0.6% 無回答 0.0%

2. 会報を読んでいますか?

だいたい読んでいる 37.5% たまに読むことがある 26.3%
毎回読んでいる 19.5% ほとんど読んだことがない 9.5%
一度も読んだことがない 5.6% 無回答 1.4%

3. 会報では、毎年 専門医試験受験者への参考にと10月号に「病理専門医試験・合格への道のり」として合格体験記を寄稿してもらっていますが、どのように思われますか?

専門医試験の参考になる 51.3% わからない 30.5%
あまり参考にならない 10.4% 必要ない 6.2%
無回答 1.7%

4. 会報の内容について、満足されていますか?

おおむね満足している 60.8% 満足している 14.6%
わからない 19.6% あまり満足していない 4.5%
大いに不満である 0.6% 無回答 0.0%

5. 会報のトピックスはどの程度病理学的内容に局限すべきでしょうか?

病理学的内容をより重視してほしい 49.6%
非病理学的内容をもっと増やしてほしい 31.4%
全て病理学的内容に局限すべき 7.0%
非病理学的内容のみでも構わない 5.0%
無回答 6.4% その他 0.6%

6. 会報の現在の分量についてお伺いします。

適当 75.4% わからない 15.4% 減らすべき 3.1%
無回答 2.8% 増やすべき 2.5% 必要ない 0.8%

7. 雑誌「診断病理」の掲載論文を読んでいますか?

気になる論文は読んでいる 62.2% ごく稀に読む 20.2%
ほとんど読んだことがない 7.3% 全て目を通して 6.4%
無回答 2.2% 一度も読んだことがない 1.7%

8. 雑誌「診断病理」は年4回の発行されていますが、回数については、如何ですか?

ちょうど良い 85.4% 多すぎる 7.3%
もっと増刊すべき 4.8% 無回答2.5%

=====

病理専門医部会会報は、関連の各種業務委員会の報告、各支部の活動状況、その他交流のための話題や会員の声などで構成しております。皆様からの原稿も受け付けておりますので、日本病理学会事務局付で、E-mailなどで御投稿下さい。

病理専門医部会会報編集委員会: 清水道生(委員長)、堤 寛(副委員長)、望月 眞(副委員長)、佐藤昌明(北海道支部)、鬼島 宏(東北支部)、上田善彦(関東支部)、福岡順也(中部支部)、大山秀樹(近畿支部)、藤原 恵(中国・四国支部)、小田 義直(九州・沖縄支部)

=====